

「畏敬の念」を培う道徳授業の工夫 ～自然との関わりを主眼にした資料の活用を通して～

那覇市立松城中学校教諭 大川 剛

I 研究テーマ設定理由

物質的に豊かになった反面、自然や人間相互の関わりが少なく、人としての在り方を深く見つめる機会が少ない環境においては、自他の生命や自然を尊び、心を打たれ、大切にするという意識が育ちにくい。近年は深刻化するイジメの問題や犯罪など、青少年の規範意識の低下が指摘されている。

学習指導要領解説道徳編の「道徳の目標及び内容」では、「3 主として崇高なものとのかかわりに関すること」の内容項目として、「(1)自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める」とあり、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うことが求められている。

「畏敬の念」とは、自然や崇高な生き方への感動を通して、自然との関係や調和の中で生かされていることなどを自覚することであると考ええる。しかし、今までの授業実践においては、資料活用の未熟さもあり、そのような「畏敬の念」を感じさせる学びをなかなか行えていない状況があった。

「畏敬」とは、「おそれ、うやまう」ということであり、それは神仏に対するもの、親や先祖などの肉親に対するもの等、畏敬に関するとらえ方は広義にわたるが、筆者は本研究において「自然との関わりに対する畏敬の念」について取り上げていきたい。そして大自然のかけがえのなさに触れることで自然と人、および自己との関わりにおける考えを深める必要があると考える。

そこで、「畏敬の念」を培う手だてとして、自然との関わりを主眼にした資料の活用を通して、学級および生徒個々の考えや認識の変化、深まりなどの変容を図りたいと考え、本研究テーマを設定した。

II 研究目標

自然との関わりにおける「畏敬の念」の深まりや、考え、認識などの変容を図るために、道徳授業の工夫と、自然との関わりを主眼にした資料の活用について研究する。

III 研究仮説

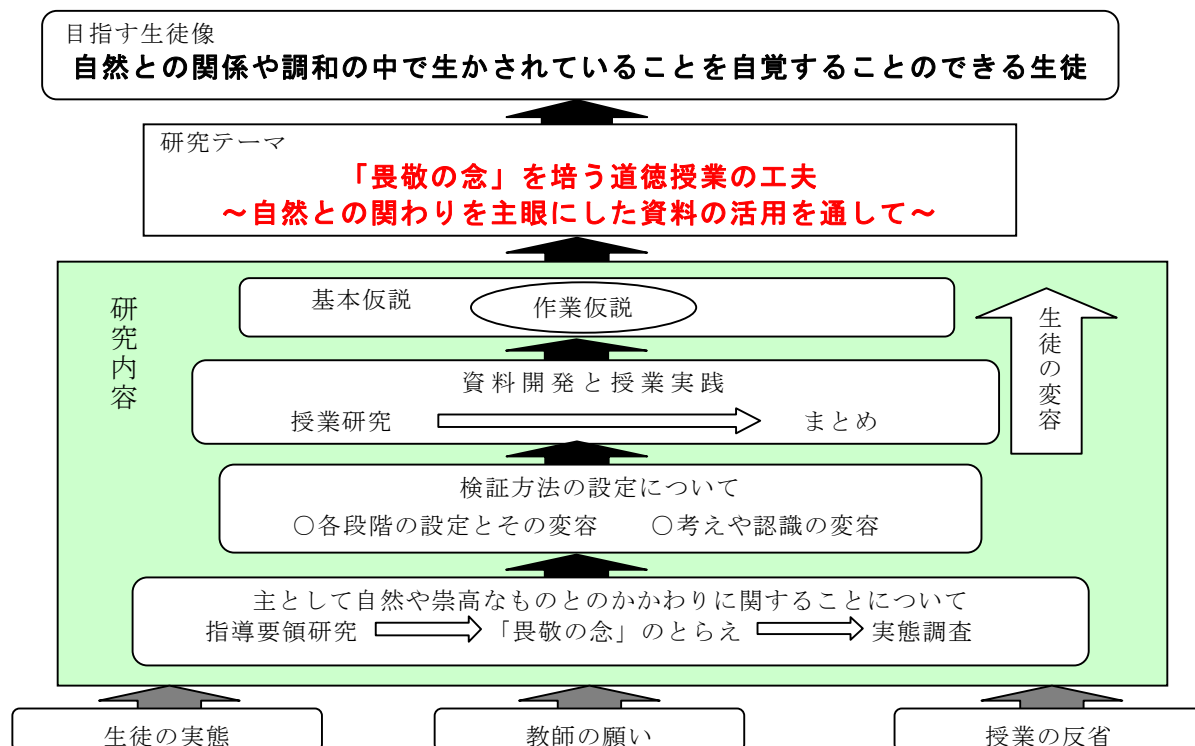
1 基本仮説

道徳授業を通して大自然のかけがえのなさに触れ、自然と人、および自己との関わりにおける考えを深めることにより、「自然との関係や調和の中で生かされていることを自覚することのできる生徒」という、目指す生徒像に迫っていきたい。

2 作業仮説

- 自然との関わりを主眼にした読み物や畏敬の念を感じた経験などを資料として、自然と人・自己との関わりを考えさせることにより、畏敬の念の深まりの段階と、自然に対する考えや認識について変容を図ることが出来るであろう。

IV 研究構想図



1 「主として自然や崇高なものとのかわりに関すること」について

(1) 学習指導要領解説道徳編より

「中学校学習指導要領解説 道徳編 第1章総説第2節から第2章第3節 内容項目の指導の観点3-(1)」より、図1にまとめた。

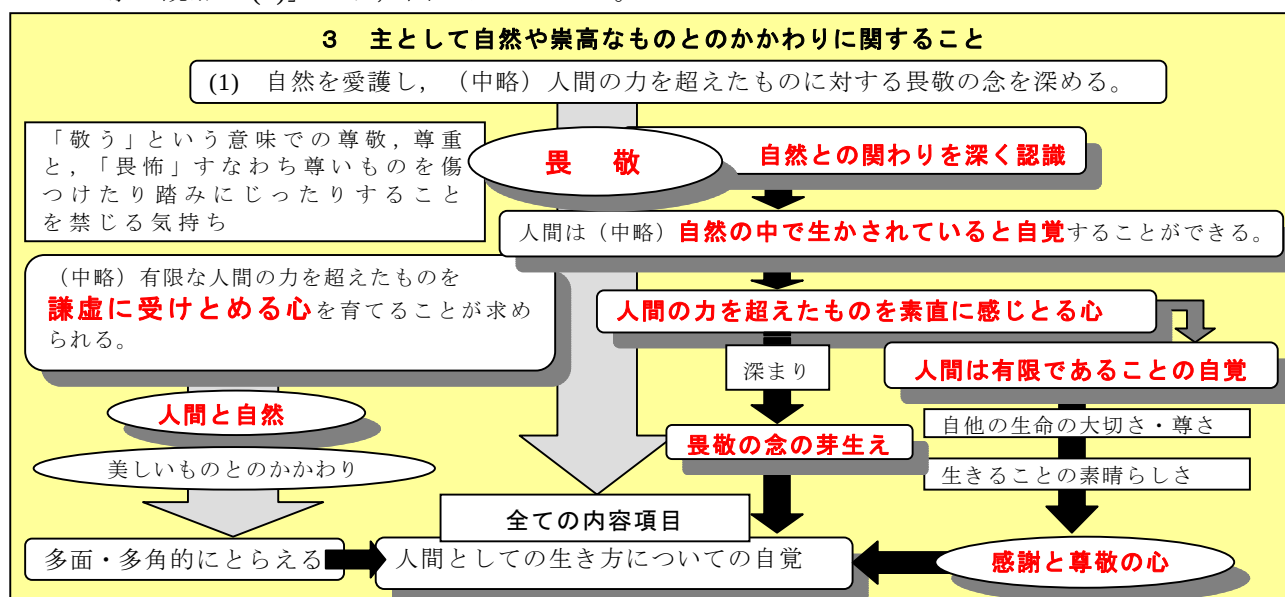


図1 内容項目3-(1)まとめ

(2) 畏敬の念のとらえ

前頁図1から畏敬とは、「敬う」という意味での尊敬、尊重と、「畏怖」すなわち尊いものを傷つけたり踏みにじったりすることを禁じる気持ちである。また、自然との関わりを深く認識すれば、自然の中で生かされていると自覚することができ、人間の力を超えたものを素直に感じ取る心が深まり、これに対する畏敬の念が芽生えるであろうと考えられる。

(中学校学習指導要領)

そこで、本研究で考える「畏敬の念」を、「自然との関わりにおいて謙虚に受けとめ、生かされていると感じる気持ち」ととらえた。

2 自然に関する考えや認識の実態調査

(1) 自然との関わりに対する畏敬の念について、生徒の意識調査（事前アンケート）

自然との関わりに対する畏敬の念について、生徒の意識調査（事前アンケート）を実施し、集計を行った。

表1 事前調査：大自然に対する考

	とても思う	あまり思わない	思わない	考えたことはない
大自然は大切な存在だと感じるか	94%	2%	3%	4%
大自然の力はスゴイと思うか	85%	9%	0%	6%
大自然の力はコワイと思うか	50%	34%	3%	4%

表2 事前調査：大自然に生かされていると感じるか

	とても思う	あまり思わない	思わない	わからない
大自然に生かされていると感じるか	56%	28%	3%	13%

表3 事前調査：不思議な事・神秘的な事に興味があるか

	大変ある	興味がある	あまりない	興味がない
不思議な事・神秘的な事に興味があるか	29%	36%	32%	3%

(2) 事前アンケートにおける「畏敬の念」の具体的体験事例の抽出

(1), (2)より、表1「自然は大切な存在だ」と感じている生徒が9割以上いるという反面、表2「自然に生かされていると感じるか」という質問に対し、「そう思う」が16%に対し、「思わない16%」,「あまり思わない28%」,「考えたことがない28%」,合わせて84%という結果が見られた。

表3より、大自然に関わる不思議なこと・神秘的なことに対する興味は「大変ある」「興味がある」合わせて65%という結果が見られた。

表4より、普段の生活において感動を覚えた体験に関しては、自然に接しての感動体験・不思議に感じた体験など、多くの具体的事例が見られた。

このことから、自然の恩恵を特別に意識していないながらも、自然に対し「感動する」「スゴイと感じる」などの「畏敬の念」につながる思いを内在している事が分かった。

表4 事前調査：事前アンケートからの抽出による、「自然を通して畏敬の念を感じた」具体的体験事例

- 那覇では見られない綺麗な夜空を、名護で見たときに感動した。
- 宝石をちりばめたような星空や、闇に浮かぶ月を見たとき。手を伸ばしてもつかめない物で、優しく見守ってくれているような気がする。切なくて、懐かしい気持ちになる。
- 何万年前の星の光が今この時間に光り輝いていて、今この時間その星は消滅しているかもしれないと考えたとき。
- アメリカの大きな滝。こんな大きな滝が人の手によって作るのではなく、自然に出来たのがスゴイと思った。
- 静かに目をつぶっていると、木がざわめいた音が聞こえたり、鳥の鳴き声などが聞こえた時。

(3) 事前アンケートの結果をうけての、授業の実施構想

上記(2)をふまえ、

授業①：「自然の権利」という資料を扱い、開発か自然保護かの葛藤を与え「自然と人との関わり」について考えさせる。

授業②：自然に対して畏敬の念を感じた経験を道德シートに書かせ、発表や意見交換など、資料として活用することで「自然と自己との関わり」について考えさせる。

授業①②の検証授業を行い、授業の工夫と資料の活用を行うことで、生徒の「謙虚に受けとめ、生かされていると感じる気持ち」における畏敬の念を培いたいと考えた。

3 自然との関わりにおける、畏敬の念の変容について

(1) 生徒に対して培いたい、畏敬の念に関する変容について

授業実践における指導目標および生徒に対して培いたい、畏敬の念に関する情意の変容を図る手だてを図2のように考えた。

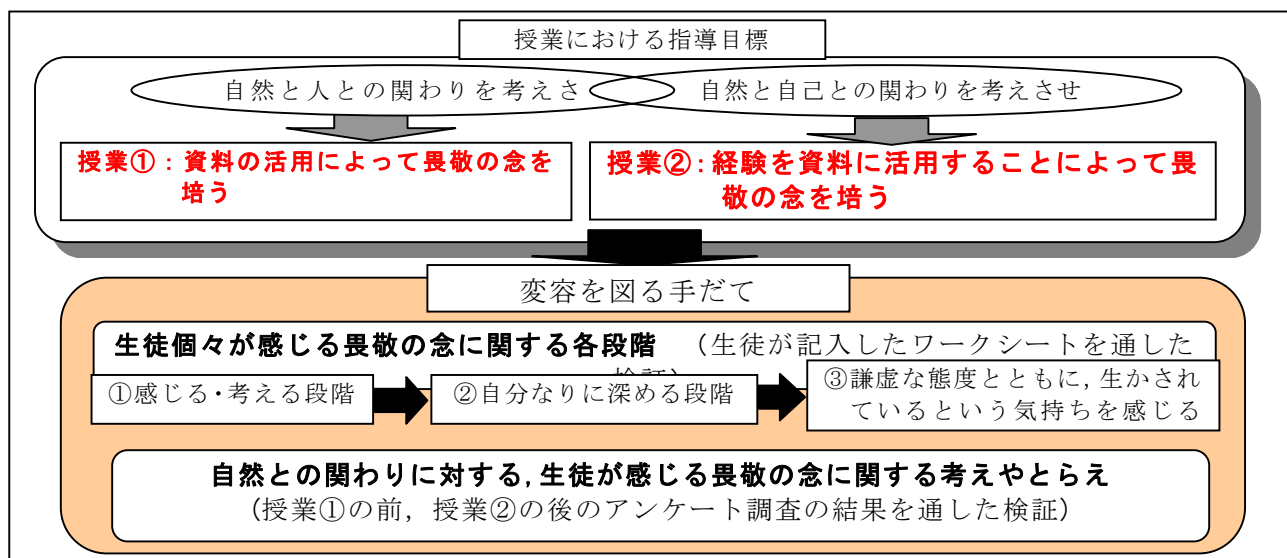


図2 授業実践における指導目標および畏敬の念に関する変容の過程

図2より、情意の変容を図るための評価の手だてとして、

①「生徒個々が感じる畏敬の念の段階」を三段階に設定

・・・授業のワークシート記入の内容を中心にした評価

②「自然との関わりにおける、生徒が感じる畏敬の念の考えやとらえ」をアンケート調査・・・検証授業前・後の意識調査を中心にした評価

を実施することにした。

また畏敬の念を深めることは、自然や生命といった人間の力を超えたものに対する感謝や尊敬の念、敬虔な心、謙虚な姿勢を生む。このことを通して、自然をかけがえのないものとして大切にしている心情をはぐくむと同時に、自然の仕組みの中で生かされているという、自然との関わりにおける認識を深める機会につながるようにしたいと考えた。

(2) 「畏敬の念」の段階表を活用した検証方法について

「生徒個々が感じる畏敬の念の変容の過程」の検証方法については、図2の段階表をもとに、次頁図3に生徒個々が感じる畏敬の念の各段階を、評価の判断項目として独自に考え、

さらにその項目をもとにワークシートの記載内容を分析・分類して具体的な評価の判断材料を設定した。

授業の際には、ワークシートに記入する時間を十分に確保することに留意し、感じた瞬間の自分の心をより深く見つめさせ、考えさせ、文章として表現させることとした。前述の段階表を活用し、ワークシートの記述をもとに、生徒の状況に応じて適切な支援を行い、各段階への系統性を踏まえ、①からは②および③へ、②からは③の段階へとつなげたい。

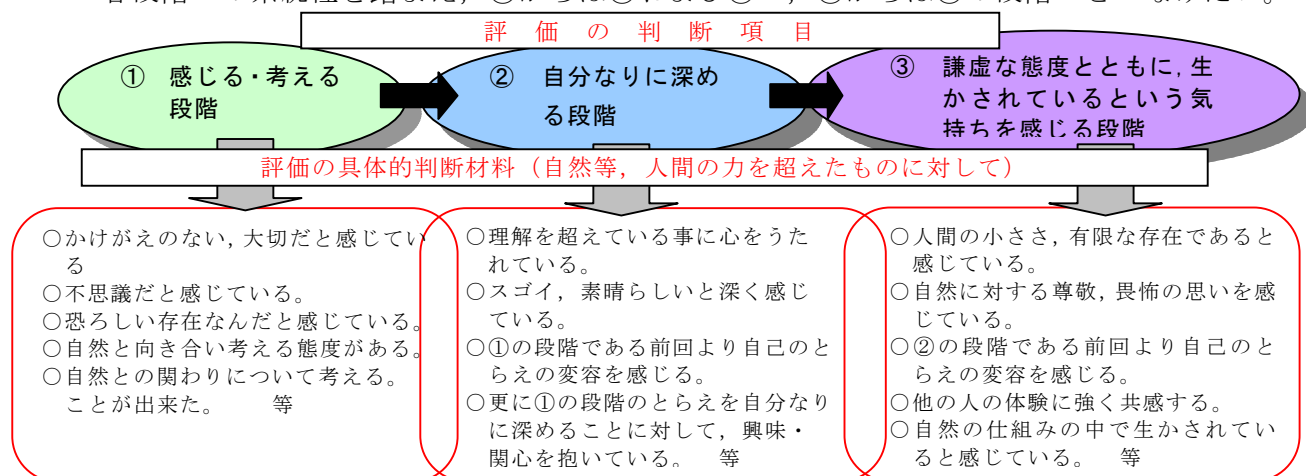


図3 「畏敬の念」への過程の段階および評価の判断の項目・具体的判断

(3) 生徒が感じる畏敬の念に関する考えや認識の検証方法について

「生徒が感じる畏敬の念に関する考えや認識についての変容」の検証方法については、自然との関わりについての事前・事後アンケートの集計の結果を合わせ、その変容を考察していきたい。

VI 授業実践

1 授業計画

○ 研究テーマに基づいた構想

V（研究内容と方法）をふまえ、研究テーマに基づいた構想を図4にまとめた。生徒の実態を把握し、指導の過程で学習状況を評価することにより、適切な支援を行えるようにしたい。また、①生徒の畏敬の念に働きかける資料の選択と提示 ②ワークシートの評価を中心に検証授業を実施した。

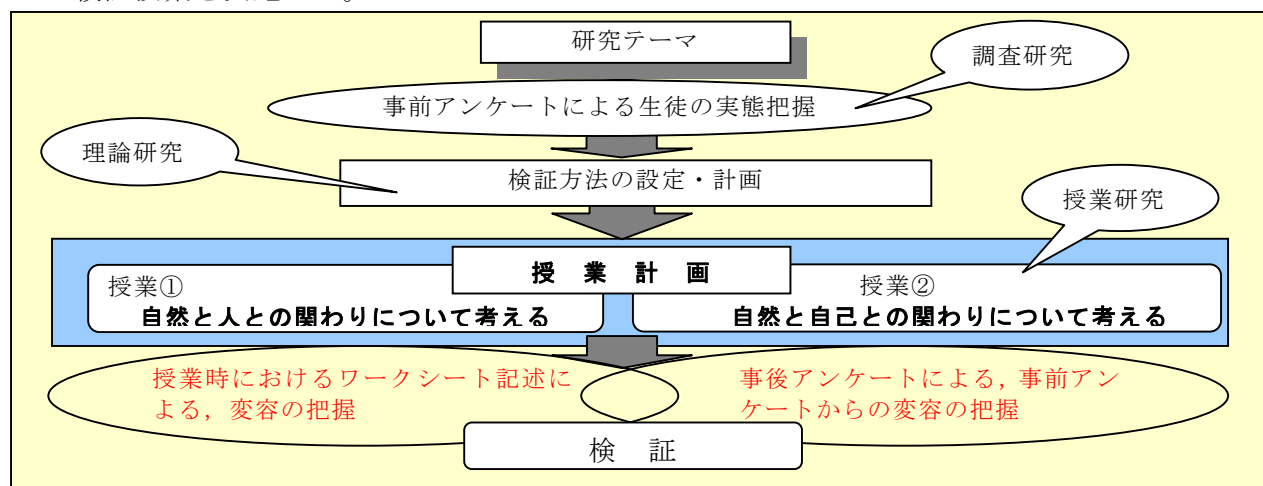


図4 研究テーマに基づいた、検証までの構想図

2 授業①（自然と人との関わり）

- (1) 主題名 自然と人との関わりを考える [3-(1) 自然への畏敬の念]
- (2) 資料名 「自然の権利」 (自作資料, 自然界の「奄美・自然の権利訴訟」に学ぶより)
- (3) 資料の工夫

- ①資料から自然への畏敬の念について, 考えの深まりへつなげていく。
- ②パワーポイント資料 (ICT) などで, 興味・関心を引き出す。



- (4) 指導方法の工夫
 - ①自然と人との関わりについて畏敬の念を感じさせ, 培うことにつなげる。
 - ②自然と人との関わりについて気付かせ, 人間の力を超えたものに対して「謙虚に受けとめ生かされているという気持ち」について考えさせる。
- (5) 評価

- ①お互いの立場になって, 様々な角度から考えを深め, 話し合いを行い, 積極的に考え, 発表を行うことが出来たか。 (ワークシート・発表・観察)
- ②他の人の意見に興味をもって耳を傾け, 自然と人との関わりについて, 中学生らしい健全な考え方・認識で考えることが出来たか。 (ワークシート・観察)
- ③自然と人との関わりにおいて畏敬の念を感じ, 考えの深まりがみられたか。 (ワークシート・発表・観察)

3 授業②（自然と自己との関わり）

- (1) 主題名 自然と自己との関わりについて考える [3-(1) 自然への畏敬の念]
- (2) 資料名 道徳シート (自作資料『人間を超えたものへの「畏敬の念」の道徳授業』諸富祥彦著 明治図書より参照し自作)
- (3) 目標
 - ①生徒が自然と自己との関わりについて考えを深め「謙虚にとらえ, 生かされている」という, 本研究で考える, 自然への「畏敬の念」について考える態度を養う。
 - ②生徒がお互いの畏敬の念を感じた経験を聞き合うことで, 気持ちの共有や感性の違う意見への驚きを素直に受けとめる態度を養う。
- (4) 資料の工夫
 - ①自然との触れ合いの中で感じた「畏敬の念」の経験を道徳シートに書かせ, それを資料として, 発表や意見交換などに活用する。
 - ②写真やパワーポイント資料 (ICT) などで, 興味・関心をもたせる。

— 「自然」の権利 —

これは鹿児島県奄美大島の住み村で起こった実際の話です。
島で起こったゴルフ場建設をめぐるって、なんと! ゴルフ場予定地に生息する希少野生動物、絶滅危惧種(絶滅寸前の動物)の

①アマミノクロウサギ さん(年齢不詳)
※ウサギのなかでは最も原始的、生きだ化石ともいわれる。世界で奄美大島と徳之島だけに生息、原生林の谷近くに、樹や石、土に横穴を掘って利用したりして住む。

②アマミヤマシギ さん(年齢不詳)
※カラスの仲間、天然記念物に指定。世界で奄美大島だけが繁殖地。生息しない鳥、留鳥。色は美しい、羽は西洋で帽子の飾りとして人気が高まり、絶滅寸前になったこともある。

③オオトラツグミ さん(年齢不詳)
※奄美大島と対馬のみに生息する日本固有種。日本に生息するツグミ類中最大の鳥。全長約30cm、体全体に黒色や黄色の三日月斑や縞がある。

④ルリカケス さん(年齢不詳)
※南西諸島だけに生息する固有種の鳥。全長約35cm、全体的にずんぐりしており、後頭部は黒い、嘴は白立つ。ヤマゴキの赤褐色に似た、目の周囲の肉が露出している。

が建設会社を相手取って裁判を起したのです。野生動物が訴えて県知事と開業業者に対して裁判を起そうとした日本では初めての「自然の権利訴訟」です……。その内容は山や川、動植物など自然自身がもっている「生存する権利」つまり「自然の権利」を主張したのです。

資料「自然の権利」



喜屋武岬にある奇岩



海岸の波しぶき



斎場御嶽の割けた岩

○パワーポイント資料



(5) 指導方法の工夫

- ①心霊現象やオカルト的なものに流れないように配慮する。
- ②体験の発表を通して、自然と人との関わりについて生徒が互いに自然に対する畏敬の念に触れ、「謙虚に受けとめ、生かされているという気持ち」について考えさせる。

(6) 本時の展開

	学習の活動 主な発問○ 教師の指示◎	留意点☆ 評価△ 補足指導※
導入	1 導入 ◎各自で着席。 ・学習のねらいと資料の内容を説明。 ・「人間の力を超えたもの」について説明 ○物事を見聞して美しいと感じたことはあるか。	☆心霊現象やオカルト的なものに流れないように配慮する。 ※パワーポイント資料で本時の読み物資料に対する興味・関心を引き出す。
展開①前段	2 資料の説明 基本発問 ○道徳シート＜あなたは、神や人間の力を超えたものの存在を信じるか＞ 中心発問 ○道徳シート＜自然に触れることで自分が体験した感動やスゴイ、コワイと感じた事＞ ◎発問を通して、自然との触れ合いの中で、自分が感じる畏敬の念を抱いた瞬間をイメージさせる。 ・教師の体験談を例として話す。・生徒の畏敬の念を感じた体験の発表 3 意見をまとめ、分類する。	☆生徒の個人的な「信仰の自由」に抵触しないように配慮。 ☆教師の体験談を聞きながら自分の経験を想起し、シートに記入させる。 ※経験が出せない場合、家族や親戚の体験でも良いと伝える。 ☆体験した事実だけでなくその時の感覚や気持ちも語らせる。☆机間観察を生かし、多様な場面での経験を紹介し合うようにする。
展開②後段	4 自己を見つめる ◎意見のまとめを通して、自分をふり返って考えさせる。 ◎道徳シートにタイトルを考えさせる。 ◎自分をふり返って深く考察させ、抽出して発表させる。	☆自分の思いを素直にタイトルとして書くよう指示。 ☆意見のまとめを、自己をふり返って深く考察させる。 △評価① ☆神や人間の力を超えたものの存在を信じることが目的ではなく、自分の考えを再認識させることに留意させる。
終末	3 ねらいとする価値のまとめ ◎自分が付けたタイトルの理由を書かせる。 ◎授業の感想を書かせ、抽出して発表させる。	☆なぜそのタイトルを付けたか、具体的な理由を書かせる。 △(評価②) ※思い浮かず、書けないでいる生徒に対しては、補足説明し、援助を行う。☆感想が反省文にならないよう配慮。

(7) 評価

- ①生徒の自然に触れ、感動し、畏れを抱いた体験を引き出すことで、自然との関わりについて感じた「畏敬の念」について考えを深めることができたか。

(ワークシート・発表・観察)

- ②生徒が自然との関わりにおいて、自己にある「自然への畏敬の念」を感じ、変容を図ることができたか。

(ワークシート・発表・観察)

VII 結果と考察

1 検証授業の結果と考察

検証（作業仮説）

自然との関わりを主眼にした読み物や畏敬の念を感じた経験などを資料として、自然と人・自己との関わりを考えさせることにより、畏敬の念の深まりの段階と、自然に対する考えや認識について変容を図ることが出来るであろう。

【手だて1】

- (1) 自然との関わりにおける「畏敬の念」の変容段階を授業時のワークシートの授業後の記入より判断し検証する。
- (2) 畏敬の念が育つ過程の3段階において、ワークシートへの記入から生徒の実態を把握し、指導の過程で学習状況を評価した。また、各段階における表記として、

- ・ 感じる・考える段階 ‘①の段階’
- ・ 自分なりに深める段階 ‘②の段階’
- ・ 謙虚な態度とともに、生かされているという気持ちを感じる段階 ‘③の段階’

と表記することにした。

【結果1】

- (1) 自然との関わりにおける畏敬の念について各段階に評価し判断を行うために、授業①②各授業時のワークシートに記入された内容から抽出し、図5にまとめた。

授業①：自然と人との関わり	① 自然と人との関わりについての考え（自然に対し、人間はどう関わっていくべきか） ○ 自然に対し、感謝とお返しを持ちたい。 ○ 自然に対し、もっと感謝し大切にしたい。 ○ 自然に対し、身近に感じ、大切な存在だと感じていくこと。 ○ 自然に対し、共に支え合っていく。 ○ 自然に対し、感謝して共存していくこと。 ○ 自然に対し、一人一人が考え、共に暮らしていく。 ② 授業後の感想 ○ 自然と人とは一体である。自然と人とは運命共同体であることが分かったし、自然を大切にしないといけないと思った。 ○ 自然がよりよく住める環境を求めて行けばいいと思う。 ○ 今日の授業を受けて、いろんな事を感じました。机も木を切って作っているということです。自然は僕たちにとって、大切な存在だから自然のことをもっと考えるべきだと思いました。 ○ 今日は先生の道徳の授業で、自然は人間の生命の源と知って、自然を身近に感じる事が出来た。 ○ 人は自然なしでは生きられない。だから環境のことを考えなければならないと感じた。
授業②：自然と自己との関わり	① 本時検証授業：本時の授業につけるタイトル（タイトルをつけた理由） ○ 自然の素晴らしさ（自然はコワイ事もあるけど、それも自然の素晴らしさだと思ったから） ○ 自然のコワサ（自然のコワサはすごくて、神秘的だから） ○ 自然の感じ方（人にとっていろんな感じ方があって、海にとっての恐怖もあれば、綺麗と感じる人もいる。人それぞれの感じ方があるから） ○ 自然 ～人間には創れないもの～（自然の迫力、偉大さは、人間には到底作れることではない） ② 本時検証授業：自然との関わりについて、畏敬の念を感じた体験 ○ 何とか歩けるように整備された山道を歩いたときに、周りから葉の揺れる音や動物の鳴き声が聞こえたりして、こんな狭い範囲でも様々な動きが起きてるんだなと思って、自然の偉大さや迫力に、そして地球には様々な命があるっていうことに感動した。 ○ 何気なく空に手を伸ばしたとき。近くに見えた空は果てしなく遠くて、自分の掌がとても小さく見えた。私はちいさな存在なんだなって思った。 ○ 田舎のおばあちゃんの家で見た星空が、とても綺麗だった。想像できない程に遠い昔の輝きが私たちの目に映っているんだなって感動した。 ③ 授業後の感想 ○ 表5に抽出のため、省略。

図5 ワークシートの内容より抽出

(2) 前頁【手だて】(1)～(2)を受けて、自然との関わりにおける畏敬の念の深まりについて設定した上記①～③の段階に分類して評価を行った。

その結果、授業①～②にかけて、

①の段階（感じる・考える）の生徒が、22 名から 6 名へと減少の傾向が見られた。

②の段階（自分なりに深める）の生徒が 11 名から 18 名へと増加の傾向が見られた。

③の段階（謙虚な態度とともに、生かされているという気持ちを感じる）の生徒は、0 名から 9 名へ、

と増加の傾向が見られた。

(3) 表 5～7 は抽出生徒 A～G の情意の変容の様子をワークシートの感想より判断し、抽出したものである。変容については、①の段階から②及び③の段階への変容が見られた生徒。

②から③の段階への変容が見られた生徒を事例として抽出した。

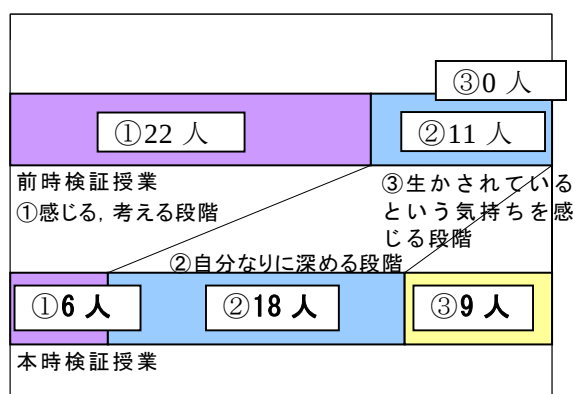


図 6 自然との関わりについて、授業後の変容

表 5 抽出生徒の情意の変容Ⅰ（①の段階から②の段階への変容）

抽出生徒	授業①の感想	授業②の感想
< A の変容 >	自然の大切さを改めて考えることが出来た。	自然に対して、改めてスゴイと思った。もう少し、自然を見てみたら、もっと色々見つけそう。
< B の変容 >	今まで「自然」に対してあまり関心を抱いてなかったけど、今日の学習で考えを深めることが出来ました。	今日の授業で自然に対する考えや意見を深く知ることが出来ました。自然は「スゴイな」「怖いな」「感動」と思うことが出来たし、自分にとって良い経験になりました。

表 6 抽出生徒の情意の変容Ⅱ（①の段階から③の段階への変容）

抽出生徒	授業①の感想	授業②の感想
< C の変容 >	人は自然なしでは生きられない。だから環境のことを考えなければならない。この授業を通して「自然の大切さ」について学んだ。	自然のスゴサ、コワサ、恐ろしさなどを全部含めて自然を受け入れなければならないし、この授業を通して、なぜか、人それぞれの個性を大切にしていかなければならないと思った。この授業を通して学んだことは多かった。
< D の変容 >	今日の授業を受けて、自然の大切さが改めて分かった。	いつも普段は過去のことを思い出すこともなく、普通に今だけを過ごして来ました。でも、本当は、すごく思っていた事（自分の生まれた意味、生きている意味）などを思い出させてくれて良かったです。

表 7 抽出生徒の情意の変容Ⅲ（②の段階から③の段階への変容）

抽出生徒	授業①の感想	授業②の感想
< E の変容 >	自然と人との関わりについて考えることが出来て、本当に良かった。	私は自然の中で一番空がすきですが、皆も私と同じように自然の存在におそれを感じているだって事が分かりました。自然に中にどこか温かな懐かしさを感じているのは私だけじゃないと思います。人って、自分より大きな壮大な自然に恐怖や尊敬の思いを持っているから、自然という存在に惹かれるんじゃないかな。
< F の変容 >	授業を受けて、人間が破壊している自然を、人間は元に戻して行くべきではないかと思った。	僕はこれまでよりも自然に対して偉大さとかを感じれるようになりました。そして、この地球は様々な自然・生命の上で成り立ち、自分たちはこの地球の上に生かされているんだなと思った。

表 5, 生徒 A・B については,

①の段階（感じる・考える）から、自然に対して「スゴイ」「怖い」「感動する」と感じるという②の（自分なりに深める）段階への変化が見られた。

表 6, 生徒 C・D については,

①の段階（感じる・考える）から考察の深まりの過程を経て、③の（謙虚な態度とともに生かされている

という気持ちを感じる）段階への変化が見られた。特に D に関しては考察の深まりの中から、「自分の生まれた意味、生きている意味」について考えるなど、更に「人間としての生き方についての自覚」が見られた。

表 7, 生徒 E・F については,

②の段階（自分なりに深める）から、壮大な自然に対する恐怖や尊敬の思い、自然に対して偉大さを感じ、「生かされている」という事について③の段階への考察の深まりが見られた。

(4) 各段階の変容の移り変わりの詳細について、表 8 に分類した。

表 8 各段階においての、生徒の変容の移り変わり詳細

	変容のパターン	人数
(ア)	①の段階から変容が見られなかった生徒（授業欠席による、判断が不可能な場合も含む）	6 人
(イ)	②の段階から変容が見られなかった生徒	6 人
(ウ)	①～②の段階へ変容が見られた生徒（①については授業欠席による、判断が不可能な場合も含む）	13 人
(エ)	①～③の段階へ変容が見られた生徒（①については授業欠席による、判断が不可能な場合も含む）	3 人
(オ)	②～③の段階へ変容が見られた生徒	5 人

結果、授業①②実施の際のワークシート、道徳シートから、生徒の各段階の過程における変容のパターンが（ア）～（オ）のように見られ、学級 33 人中約 3 分の 2 近く、21 人の生徒が「自然との関わり」について、各段階の過程において変化が見られた。しかし、一方で合わせて 12 名が①、②の各段階から変化が見られなかった。

【手だて 2】

○ 授業前後のアンケートによる調査の結果から検証する。

【結 果 2】

(1) 表 9, 10 は授業①②実施前（事前調査）、実施後（事後調査）アンケートによる集計結果の比較である。

前頁表 9 の「自然は大切な存在だと感じるか」については、「とても思う」は前

表 9 自然は大切な存在だと感じるか				
	とても思う	あまり思わない	思わない	わからない
事前調査	91% (30 人)	0% (0 人)	6% (2 人)	3% (1 人)
事後調査	91% (30 人)	9% (3 人)	0% (0 人)	0% (0 人)

後 91% (30 人) 変わらず、「あまり思わない」は 0%～9% (3 人) と増加。「思わない」は 6% (2 人) ～0% と減少、「わからない」は 3% (1 人) ～0% と減少の結果であった。

表 10 「自然に生かされていると感じるか」については、

「とても思う」は、

表 10 自然に生かされていると感じるか				
	とても思う	あまり思わない	思わない	わからない
事前調査	27% (9 人)	15% (5 人)	27% (9 人)	43% (14 人)
事後調査	58% (19 人)	27% (9 人)	3% (1 人)	12% (4 人)

15% (5 人) ～58% (19 人) と増加し「あまり思わない」は 15% (5 人) ～27% (9 人)

と増加。「思わない」は28%（9人）～3%（1人）と減少し、「わからない」は40%（13人）～13%（4人）と減少の結果であった。

(2) 図8, 9は自然に関する考えや認識の変化を、授業後に自己評価したものである。

図8は「自然は大切な存在だと感じるか授業後の自分の変容」について、

「前より考えるようになった」41%（13人）
「少しは考えるようになった」50%（16人）
「以前と変わらない」・・・3%（1人）
「わからない」・・・6%（2人）

の結果であった。

図9は「自然に生かされていると感じるか、授業後の自分の変容」について、

「前より考えるようになった」31%（10人）
「少しは考えるようになった」37%（12人）
「以前と変わらない」・・・16%（5人）
「わからない」・・・0%

の結果であった。

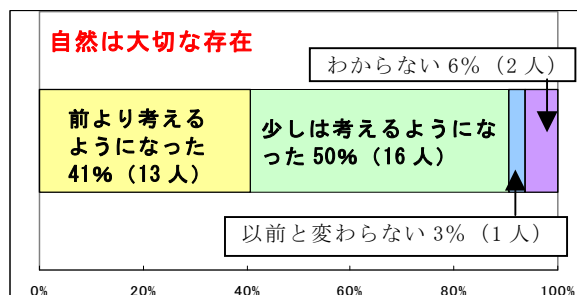


図8 自然は大切な存在だと感じるかについて、授業後の自己の変容

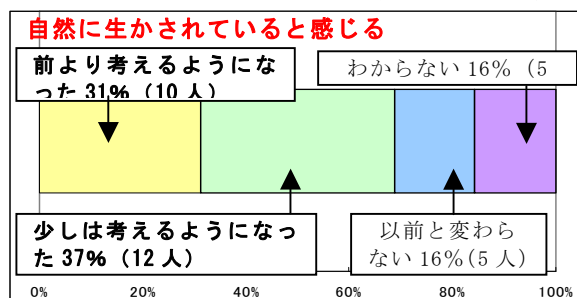


図9 自然に生かされていると感じるかについて、授業後の自己の変容

【考察】

(1) 【結果1】(1)～(4)から、授業①について

野生動物が人間に対して生存権を求めて裁判を起し、「自然の権利」を主張したという事例によって、自然に対する驚きとともに、本授業に対する興味・関心をもたせることが出来た。そして「自然と人との関わり」を身近な問題としてとらえさせ、人間の力を越えたものに対し「謙虚に受けとめ、生かされているという気持ち」について考えを深めることが出来た。

授業②について、

自然に対して畏敬の念を感じた経験を道德シートに記入させ、それを資料として発表や意見交換などに活用することによって、互いの畏敬の念を感じた体験を聞き合うことで気持ちの共有や感性の違う意見への驚きを素直に受けとめる態度を養うことが出来、「自然と自己との関わり」について考えを深めることが出来た。

また、授業①②ともに、パワーポイント資料などのICTの活用によって課題を分かりやすく提示することや、郷土の史跡や植物、動物、奇岩など身近にあるものを写真資料として活用し、授業に対する興味・関心を持たせる工夫なども行った。

このような指導の工夫と資料の活用が、①の段階（感じる・考える）や②の段階（自分なりに深める）から、自然への畏敬の念に対する考えや認識において、より深まりのある段階へと変容が見られる結果となったと考える。

しかし一方で表8に見られるように、①の段階・②の段階から変容が認められない生徒もあり、今後も資料の選定や開発、指導方法の改善のほかに、他の内容項目へと相互に関わりをもたせた年間指導計画の充実の必要性があるという課題が残された。

(2) 【結果 2】(1)～(2)から、表 9, 10 について

「自然は大切な存在か」「自然に生かされていると感じるか」の質問に対する解答で、「わからないと答えた生徒の割合が減少または 0%の傾向を見せている。これは生徒の一部においては、当初自然との関わりを自己の身近なものとして特別意識しておらず、漫然ととらえていた状態であったと推察される。それが授業を通して考えと認識を深めていく過程で自然と人間、自己との関わりにおいての畏敬の念について、自分なりに真剣に考え、「自分はどうか感じるか」明確にとらえようとする意識・態度が培われてきたと思われ、そのことが事後調査の結果として、「わからない」と答えた生徒の割合の減少という傾向を生み出したと考える。

そのことは図 8, 9 より 授業後の自己の変容について、「前より考えるようになった」「少しは考えるようになった」と答えた生徒の割合があわせて 91% (図 8) 68% (図 9) であり、多数を占める意見であることから、畏敬の念に対する考えや認識が培われてきた根拠とすることができる。

このことから、生徒の多くは授業後「自然との関わり」についての考えや認識について、自己の変化を感じており、自然に対し、「謙虚に受けとめ、生かされていると感じる気持ち」について考えを深めていこうという、意欲の高まりが見られた。

Ⅷ 成果と課題

1 成果

- (1) ICT や読み物、自然に対して感じた経験を資料として活用し、指導方法の工夫を行うことで、学びの過程において自己の変化を感じ、「謙虚に受けとめ、生かされていると感じる気持ち」について考えを深めていこうという意欲が高まった。
- (2) 考えや認識の深まりの中から「自分の生まれた意味、生きている意味」について考えるなど、「人間としての生き方についての自覚」へつながる、学びの発展が見られた。

2 課題

- (1) 更に共感に訴える教材資料の選定と開発、指導計画の充実が必要である。
- (2) 生徒の実態把握と指導の過程での、個に応じた適切な支援・指導の継続が必要である。
- (3) 「人間としての生き方についての自覚」とのかかわりへの発展的指導が必要である。
- (4) 他の内容項目へと相互に関わりをもたせた年間指導計画の充実が必要である。

《主な参考文献と引用文献》

『文部省告示 中学校学習指導要領』 財務省印刷局	1998年12月
『中学校学習指導要領解説 一道德編一』文部科学省	1998年10月
『人間を超えたものへの「畏敬の念」の道德授業 小学校』諸富 祥彦著 明治図書	2007年 9月